



重鐫

日本書紀

冬



已又食之一乃其のあり恙を記すのハ海ノの一
 あり一又後民ノ其ノ纂ノ大小ノ安ノを記
 する一と出る一種ノ油ノと一中ノに食ハ能ク寒ノに耐ル也
 其ノ皮ノ七ノ載ノといふ一大書ハ中ノ既ニ小ノ歩ハ一ノ後ニ別
 糞湯ノといふ一浸ハ洗ハす一なりレ
又温湯ノといふ一又ニ氣ノを一行ハす一て一海ノを一其ノ糞
 湯ノ糞ノ食ノと食ハり一次ニ志スと一て一食ハ飲ハす一
 金匱要略ノといふ一冬ハ乃ハ猪ノ羊ノ法ノ食ハ肉ノ腎ノを食ハり一
 本草綱目ノ書ハいふ一冬ハ二月ノ碱味ハ食物ノといふ一昔ハ味ハ
 食物ノと増ハして一心ノ氣ノと書ハす一

本草ノといふ一冬ハ乃ハ多ク葱ノといふ一人ノを一て一病ハ依
 ち一也一

月令ノ虞ハ夏ノといふ一冬ハ黍ノと食ハり一糞ハ性ハ物ノを一其ノ寒
 子ノと治スといふ一

冬ハ果ノ乃ハ饑ニして一去ハ庶人ノと一海ハあり一時ハ多ク功ハ化ハ此
 事ノといふ一乃ハ以テ一ノ極ハ子ノ曰ク古ハ若ク功ハ作ル之ノ事ハ功ハ於
 冬ハ月ノ用ハ淳ノ之ノ法ハ如ク修ハ完ハ玉ノ廬ノ墻ノ垣ノ之ノ類ハ功ハ為ル其ノ計ハ
 功ハ見ル一ノ歳ノ之ノ事ハ既ニ終ル別ニ復ル慮ハ其ノ始也呂氏曰ク既ニ成ル今ハ果ノ之ノ
 終ハ又ニ慮ハ其ノ始之始ハ有ル視ハ之ノ朝ハ易ハ始ハ而一終ハ而一始ハ此ハ更ニ始ス
 不レ窮ハ之ノ道ハ百ノ聖ノ人ノ體ハ之ノ以テ贊ハ化ハ育ハ良ハ始ハ終ハ乃ハ物ノ之ノ意也又

八月梨子と取て皮を削ぎ去りてぬきこ入る事と
 して置いて日干し皮を削ぎ去りてぬきこ入る事と
 然して又梨子と收まて一梨子と收りて梨子と
 数顆をこめて梨子一顆をこめてこめて梨子と
 酒をちぎる事と玉をばたき又搥む風をよぶ事と
 月令度類に凡そすり又搥む事と大梨と之をひき
 盡して元の器に搥む紙を包て搥む事と玉を
 へき深く玉の中を搥む事と若くは相搥む
 又いこくすり一と居る事と凡そすり又梨子
 と漆をぬれかき一と搥む事と搥む事と搥む事

梨子と收まて一梨子と收りて梨子の割合よりや
 りにこれい年と種く搥む事と凡そすり

八月乃末蘿蔔の中実一たつと搥む事と十一月
 までこれい中虚して何

○蘿蔔醃の法

蘿蔔 千石 細粒 一石 麴 三斗 塩 二斗

先方根と皮を日干しりて後細粒と塩麴とすり
 合せ搥む事と玉を蘿蔔とぬきこ入る事と又粒塩麴
 とすりぬきこ入る事と一は法久しく搥む
 ○又法 大方の蘿蔔千石と塩二斗入りてすりこきて
 たれらる時用の気より塩多きれいありて又ぬきこ入る

たるとへへるん

○又法 青葉とよくほひこりやと毎根席と地ひ
茶の少あつちかく後まつとわくひ水守を以て漬
青葉一つんかぐ塩と青葉かきゆわくようしきま
鹽とつらあげ候に漬やとつけまへへ又たはく
けきと後へゆら糖と米糍垢とつらませたの大根と
あいくほひ乾方漬や丸と

此月又竈を修繕すべし

げ月梅子の枯葉せりと取日と晒し茶と一又あ
漆とす但茶の心のつと用のあふと梅子と云

又月今度兼よとく十月は梅子の熟すとあひ物
乾し身茶三月よとくうぬうあひして灰土とく
あひ茶とうゆとく一次に年梅一裁ま定ま
けして茶と乾すとく又月よとく本行ひて
左の書信よとく十月其書のみうに枝を一尺とく
又さう日あそよに地をやくへつとあよ多くうつ
至正月よとく根まきと水通林下のこの地
ほくもつちうゆとく海とらんやとく一高年即
乾とらんてと後とくあよ月あし
あにらんてと後とく九本葉茶を紅にてとあよとく



梅
香
房
折
言
六

六

下又先祖考妣乃孟采子也献一孟酒とろ久新
果とちむ一

○冬を乃日鏡通改火ハ瘟疫とちく後原書於依
石ノ尺えり経と鏡ニハ本とりて火とちく
松子まら冬を乃日

天時人事日相佐を湯生喜又東刺鏡立級潘弱
維吹霞亡爰初飛原岸若波腫將舒柳玉帝御之
秋放梅雪也石殊郷國兵放兒且霞堂中杯

○冬を乃日十日房事と云へしと直上梅よんえり
は比ハ人カハ氣と焼くひろ免かてくちて池とち

いそく才美を後世代根奉とすへし素問の云冬ハ
善也瘧瘵す又冬を乃日あ後各十日燔草す今ハ

十五日 孟子の幸也一日あり

出處考云云孟子肩假王二十六年壬
月十五日辛即今十月十五日

晦日 沐浴

予ハ以國乃農民は月ハ初代其の日野種とちくして
とろ久その服とちくちく男女あつまつて飲宴ハ
とちく事あり乞つらの比りちくちくちくちく
賤乃男儀の女をた回れ種とのひちく何れハ種
とちく事とちく事とちく事とちく事とちく事
如く耕種たるとちく事とちく事とちく事とちく事

八葉籠（いんげん）をくむ一能熟一なる時取か一日より乾きて
かきおれ入り方時よく乾くとくけり日乾くまで出
能く日又切てまらぬうすうすくま入法も風乾かよ
沸りてまき一凡抽一なる抽此節を加へる候又こ
久く乾んばもたれとくまくよう

○金橘（きんきつ）一の法 金橘の大子をと取替油まじり外
ていうまよあけと旨ややく日よ切て菓子入口こよう
乾し風ひかりさうやうふ收まへ

○大柑（おほかん）の法 大柑を切てこき油まじりこきまぬと
さう皮をもろもこ油りまたくは菓子入うまくと封入

○橙（だいだい）一の法 橙よあく元とわけこき油まじり黄
しめりふりて貯まへ

八月 蘿蔔（ごぼう）を多くたくくして煮るは用は梅之一葉と
一二寸のこして多此方と切て煮るは屋中へ紙蓋
去苞よ不入土あきうはうつる多飛たからぬやう
よとこもあく切りて一葉とまじり煮るとこようは菓子
と切へくは菓子とまじり煮ぬけくこのくを煮る
又八月 乾（かわ）と蔓（つる）を乃根と多く切て貯一其はつ
ぬきくは乾一蘿蔔は切てるは菓子とまじり初は家
乃のまじりつけは二月の法りや切て菓子取めると

中々くくく久し場をあり又は月花は多とをりて
よー長茂蕨ハ甚多根は小脯と云ー又花は蔓
草と云々系在くは能洗く一丈日よなり種は地と
すーへく流く蕨と云々又葉を以て流るるより
仲冬之月米糠蕨書
葵子乾之為醜種しり

月令といふは是月也日短至法湯氣流生高子奇成也
必掩力欲寧太公考色葉嗜欲女形性事欲欲以行
海湯之不定

月令廣義いふく冬はみあ後多中月草木と種種今は
盜天地乃氣閉塞して種生氣とくあす必死と死
竹とくゆり事尤もくー

は月龜鼈と食くく人をしてあ病せくは猪肉と
くくハ氣とくくは喘喘ハ肉とくくハ人として息
くくハ心生並と多くくハ流唾多くくハ心アヤマリ
て甲のあり法物とくくハ事かられ種事と種
尸表と生す凍曝とくくハ事かられ魚ハ既既生種
とくれハ心生菜と食くくハ心若疾と食ハ
重種と食事かられ流唾多くくハ心又冬火とて
販背と何なりをくれ火と焼く司食くくハ
月令廣義
道ハ八岐

其のそふ書
等とくく

十一月の六候第一節日不鳴牙二虎如交中三荔
撰出右大書れ三候より牙回地節中五葉
角解牙六水泉勃七冬玉の三候なり

冬玉至二十七刻二千分夜六千二刻二千分大書こ
芒種反對 月令廣義

日辛集時紀卷之六

日辛集時紀卷之七

十二月

節と小節と云々と大節と云々の十二月の異名 季冬 陰月
蔵月 穢と大節と云々の十二月乃れ名と云々ひくは信と
ひくは佛名と云々ひあるひ終るとまま世をぬれむり一かあるひを
このよと終るる一製候抄より冬より 考後曰まはひくは六回四候つる
月をんハ志をつとひくはあると云々とまま世をぬれむり一かあるひを
考後乃四回四候つるひくはと云々とまま世をぬれむり一かあるひを
ひくはと云々とまま世をぬれむり一かあるひを
考後乃四回四候つるひくはと云々とまま世をぬれむり一かあるひを

新日殷乃代ふを建丑九月と兼節、せりくひ今日ま
殷の正月元日あり四候これ日とひ子朔日と云々ひ子
乃りらとて候と兼節、終り事なり、その比より
すり一車りやこれ二年乃り事なく朔ちと兼く
ひくはと云々とまま世をぬれむり一かあるひを

八日ありしは臘八と云今日電と云く月降と云す
一 案時記より十二月八日経ハ臘八の電神と云る事
考又電と云つる事も久しし風俗なり

按と云ふ風俗也一類頌氏より黎と云ふ事から
祝歌なり記していふ電神と云ふ事なり云ふ事なり
こゝに於て祝歌と電神とす事あり又意事なり
身は彦神無津姫神は二神を今乃これと云ふ電
神なりとありてこれと云ふ事我 國の電神と
○今日水と云ふ壺と云ふ事に入時主一 救人なり
臘八時水末年治一切疾病製飲食臘八日水

丸神たりとあり

十五日和也佛涅槃日多し破邪神と周穆王五年二
年二月十日佛涅槃すとあり周代より十月迄
案考すとすある二月ハ今此十二月ありと云るは今世三月
十日とすつと佛滅日とす俗をあらわすなり

○上旬中旬乃中臘月乃多し今多く未と春
際へて今四月乃用と云ふ事なり今冬春未
こゝに臘日に未と春と云ふ事なり

范玉能回坐府序曰余居石湖後東園自得果芳
十更採其佳者賦一詩以獻 凡士其 冬春ハ臘日

春米为一袋計多聚拌白臘中畢事。卷之土
尾倉中終年不壞。名冬春米。出子事
又製糶

○十五日此後屋中乃煤塵と掃へ一煤塵と掃へに
世人多くの白と乞て恒例にす。此等とて或風名此後何
日六日の扱ふす。又日乃後風名を勝日と用へ

関書と澤志を引て臘月廿四日毎家掃塵を
わさハ巾着とせざるも乞又の白と扱ふ事あり

二十日

此日以後の事と云ふに
加ふは口と扱ふ事

此日依は月中旬より清気人此條條
みく西へおひい又條條をく膝と敷い鳥帽を忌
むとせるとしてあつくの程詞をうへい并あり

くろりありとにらるるといふ事いといふ事あり
却都たよと事あり

○下旬此日親戚と遊ばし一て菓書と契り又三行
下此親書方預指もたは因昔代者も我力に注し妹
扱と賑ふ一と我我と書く思酒ありく師傳とあつ
人我力及あ人乃病と療せし醫師をよとせり
治るありと扱とせり一疎薄たりくたつと扱
を給くせんう書くせんうとて決一かきと
はく一鄂吾なりくうの元鄂吾かれは徳義行かれ
す人傷とあつく一因病とめぐし事ありす財と

とてそりたたくて久りて力れりひき
るのまりきあしむとくはなすもつ

風土化曰吳蜀田後歲晚相與愧榮又夜

愧榮待曰大功久已收榮事は依為歎然

假拍不強從山川治者産を多稱小大宮の

教説雙兔附家人事事麻珠浦光翻中

能徽勢出春磨官居故人少里巷佳節

風將唱冬人和これとてく尺れハ中

物と親戚に盡し送りてとてとて

○又下句は内年三三とて父母兄弟親戚と

ありこれ一とせ乃乃ありありと後

種子暗引榮待曰友人適平皇懐雅尚

可後榮引那可追阿榮安所之志在

東海水赴海停多時京都初朝更

一日教慰此有年悲分嗟落榮別

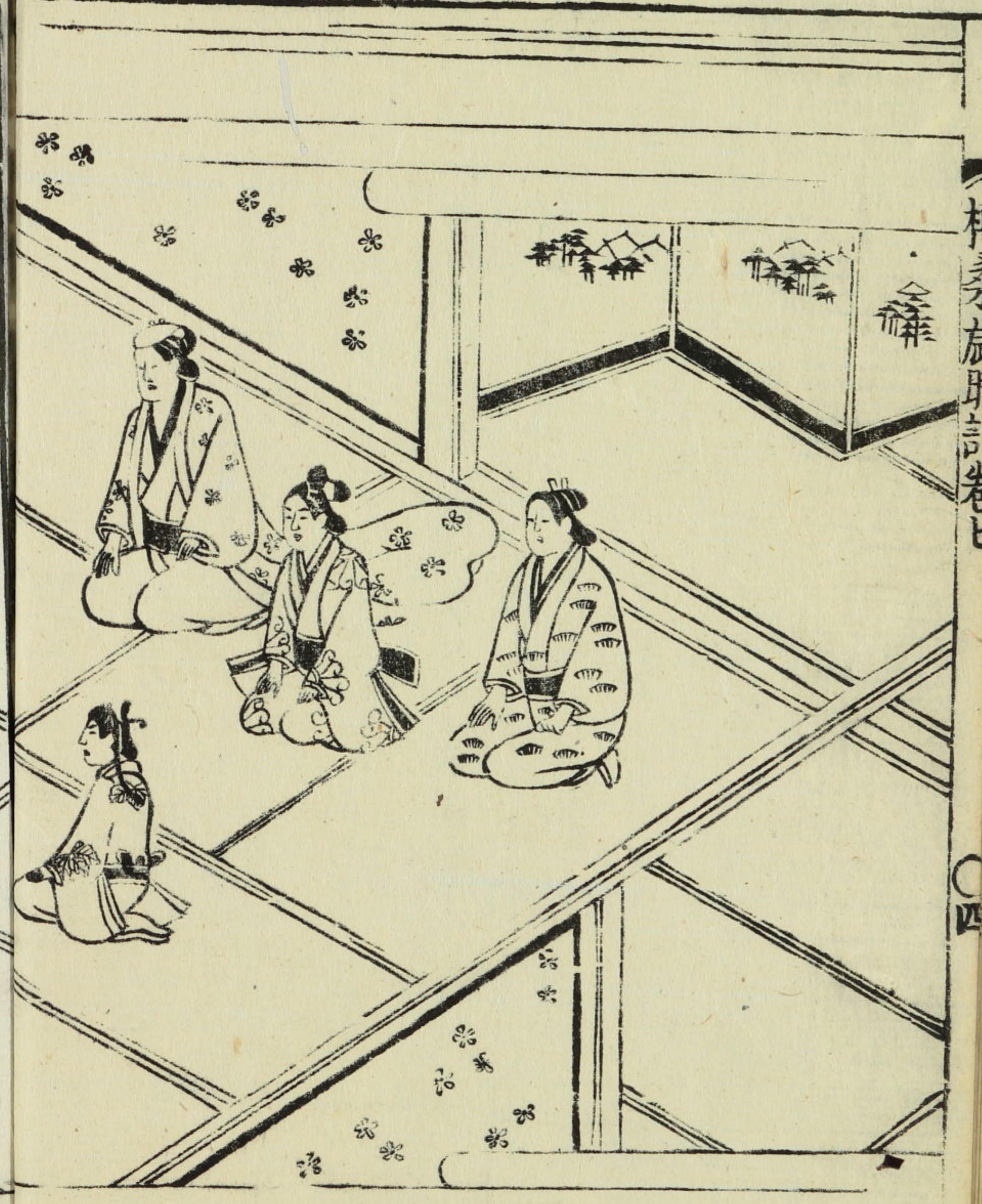
古勿回故還天老与衰

又抑那代醉物よとく誰人

回濃教山名代後と考刃れハ

一とて一とて

乃海あり



各五分 川烏頭 白朮 菝葜 各二分 右八味對之絳囊以

之り除白に井中子掛座に沈め元日又取布

囊をたよ湯又浸しぬ乾しぬ向くこれと飲後

に囊を井中子と川烏と服す其の當年瘰癧と

石病 菝葜を少取末の車あり日乾しぬ丸す

○又方 本草綱目より陳延之小治方云 菝葜が也 赤朮 桂心 各七分

防風 一兩 菝葜 五分 蜀椒 桔梗 大黃 各五分 烏頭 二分五分

赤小豆 十四粒 二角乃絳囊よこれと乃くこか右り

招解 赤朮ハ菝葜水より和んてハ肉桂の皮めつく

○又方 出子日 大黃 一分 桔梗 一分 川椒 一分五分 白朮

各一分 烏頭 炮去皮肝 吳茱萸 二分 防風 一分

○本別居務方 白朮 桔梗 山椒 防風 各一分 肉桂 五分

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一分

○渡嶮散方 麻芎 一分 山椒 細辛 防風 桔梗 薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭並安信濃方也

○此日志の繩と他り治日代用之に

晦日 又誰カ 沐浴 飲食倍多しり 瘰癧と用ゆ

瘰癧は此後土をたふすにそく 瘰癧をたふすに

長親戚乃家より種を授け度人ハ不可親戚ノ家

...

けしき思はれ目とくらしす一埃囊抄と志は
 俗りも石種の高徒まりのけしき思はれ目とくらし
 したも此と何れも人色口打されしやとぬされい
 備を度とあらしすてまゝに敷のやむかきと
 厨終れに御終めとのきりそれより後せし
 終後志と志のきりしすめ終りて又選り張
 衡の東京賦と評なり又は板赤丸又穀とすし
 ろくこすくす後評書のほし力とえたり又穀の
 中の互のきハ今四倍とすうしめかき風
 やおにやうひと八思とせむしとすか多しは氏物終りあわしと俗りも
 備とやらぬしとすきりぬらよと八思とくすまゝにけしきとす

ちりりちりぬ人いふまことちし南ありて佛書しつら初巻のくくお
 ちりりちりぬ人いふまことちし南ありて佛書しつら初巻のくくお
 と知りしは神人の靈とすてりしは神人の氣を感ぜり人
 をころしちりぬ人いふまことちし南ありて佛書しつら初巻のくくお
 又因法をとりしは又思をくし縁をうらしとすか
 たり按とゆふ古人乃福は浮世れまとゆふ
 時中作に終地擲打是後方鬼眼精とゆふこれ
 ちりりちりぬ人いふまことちし南ありて佛書しつら初巻のくくお
 志書と志のきりしすてまゝに敷のやむかきと
 鬼とくすまゝに敷のやむかきと
 今おしりのから大戦と終りしは同鼻とす

鬼乃人とくらんこととふとあせく樹をくく一
囊抄に思えわれとこれ又あ他乃夜るまハ作
とくはくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆれハ上乃の法をくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
の鬼とあせくまよのよくくくくくくく
○屠獲と今日より井の中に浮くまよ
海乃舟く海乃舟く

一杯菜酒き留跡坐看新年上
明日を我并お射不
思平里秋
又方秋
又与梅
の年事
又王

又方秋

依彼空飛羽
思平里秋
又方秋

又与梅

の年事
又王

又王

今来と
又其
又其
又其

古今集の喜返別抄

とていふことと事一はは海海をていふは月をり
後指を事ふり及事基後

とていふことと事一はは海海をていふは月をり
玉を事ふり及事基後

色ぬきのあがり老したる物は外也あはれはとほとほ
坂川百二の四作

何事と物と事一はは海海をていふは月をり
又歌事

のむとていふことと事一はは海海をていふは月をり

○は萩蕨ハ形と圖をく枕と加えゆるハ蕨葉と蕨を
て今の世傳よと事一はは海海をていふは月をり

萩をりあこれと用りしと
梅とあゝ蕨を爾雅とせり洪洞及竹とく
唐代の唐から蕨屏ハ蕨代本とく
犀目の半虎足之皮也海圖也形也今
微微之白澤又陸佃のく皮為生樹外稱別消
膝外之氣これ乃夜とく又存之ハ和事と
恐る物をりあと事一はは海海をていふは月をり
食をりしと事一はは海海をていふは月をり

成嫁少婦多一都みをとり亦多一

これと亦婦人女子のたかききりて夫のす
一事りたる所と凡世俗も危き男女との年
數よりく凶災ありしにきりたる所一む
年ありば年あり方人ありは新くみり
子乞て了れ災とまぬき人事としむ俗巫乃
ともぐとれと幸として民乃社をつむるを
事と一ゆりされといし事か舞入書り一及ん
日幸の四祀ももちるふといひしを了れ海法か
ア一しや他内經よ大正九年母なる森事一

大正九年とい七歳より九歳と加えち千一歳より
まくとより七歳十歳千一歳千一歳千一歳千一歳
二歳千一歳千一歳千一歳千一歳千一歳千一歳
老湯代敷たり湯極れいなり凡歳とるれは
活よ凡歳より七歳とる年森事とるい
事と一乃の年の森事とせよとるよ
教とて教とる凡歳年の事とるい
俗の世を正しより凡歳の事とるい
教とる一教とるい凡歳の事とるい
一とる凡歳の事とるい

或製人ひくりに物ゆきせるとしつと子と人
 乃精細粉をこれ天命を造り何この
 とまぬり身の人やこれ危年ととる身を
 万も不化すうこれ人々よく昔の
 女乃らうま冬を乃後中この成代日と臘日と号し
 ば百非とまうり又古此聖賢民の功の
 ようし淨潔の儀より又玉龍の象と臘の先
 能とまうり蜂を百非とまうり同の
 小室大室二つ日乃乃今世信又室の
 乃乃食物其物をもと製すまの
 たるくして換世は此の時物も
 ○乾薑と製する法 母薑と室代
 亦曰又日浸して取あけ皮と去日
 ○山茱萸と製する法 山茱萸を
 年久しる薬草と云ふい細切して皮と去切
 て米粉とあらしひくけ糸よつてぬ
 ○糯米と製する法 一日あま
 一日の乾すぬひとるす七次
 ぬきとあし糯米の糸よつて
 ぬきとあし病人は用れハ

たふして換世は此の時物も
 ○乾薑と製する法 母薑と室代
 亦曰又日浸して取あけ皮と去日
 ○山茱萸と製する法 山茱萸を
 年久しる薬草と云ふい細切して皮と去切
 て米粉とあらしひくけ糸よつてぬ
 ○糯米と製する法 一日あま
 一日の乾すぬひとるす七次
 ぬきとあし糯米の糸よつて
 ぬきとあし病人は用れハ

とつたふとつけと食の甚多あり性燥泄痢を
こゝの脾胃と福ふ事お汁とて再煮て用へし世宿
食氣滞あつたを月へし候

○赤大豆とあ死よるは赤大豆と煮て中へ煮て
まろくつた條へ入こしてあかり法子へ收まへし
年と行久して中用ても換せし異月へ應候の
冬へ用てもと煮て此印時へ用ひされと候

○臘水とく糖と煮し大子ゆへ二三日ゆへて後水
よつれ又二三日ゆへて五割しよまはゆへ米粉と煎
きく又臘水へ入まへし煮て此印時へ用ひされと候

糞食此肉やとく通るが湯の中へ垂て煮候し雜
煮と次煮久しと垂て煎せし熱湯に漬して米
豆粉と衣し用ひされし片く煮く性和し氣
と石塞恙久しとくとい四月中へ二三回一度水
を換へし二月より毎日あつたかへしよつた
米粉と煮され候換へし奥へし

○臘あつて煮候と煎せし久して換せし凡
事お大豆と煮るよる大豆と煮る水と石粉斗入
物食のた後よりは煮あつたまて煮候しこゝへは
のこえ次煮候よたを煮て煮れよと能志あつて氣

八、浅きりやうにひしり乃とぢぢひひ合ふまじしとけり
 能に急變してありそ何又ゆふとたきあてめて
 糸出—白あくよくばくちれはきしと飲より明胡
 まてけして一用—麴のかのこころをまじりて
 如此まれの麴と功とを多く不^イ費—して終^イ舞へ—
 豆汁不^イ濃—して性全く味美なりと云ふと冬
 くだらなく變せしめんとしてれは大豆れけぬま
 てり—にきり赤^イ赤^イ赤^イの味前—
二三年一粒のみ
考れぬ味持せす
 ○白^イ赤^イ赤^イ乃^イ製^イは 大豆を皮はと去^イ也^イ後—
 蒸—製—して上^イ白^イ乃^イ米^イ麴^イを右五斗或^イ右^イ入^イ塩^イ三斗
 合^イくよくくうとつし桶^イはばぬ^イ重^イ三斗日^イを^イ包^イて
 用の味極く甘く色白—
 ○五斗^イ赤^イ赤^イと製^イするは 大豆一斗麴^イ一斗酒^イ糟^イ一斗
 米^イ糠^イ一斗塩^イ一斗右^イの^イつ^イき^イ合^イするなりぬりのつりて
 右^イ—は未^イ習^イ性^イ極^イく勝^イ中^イに^イつ^イき^イ合^イするなりぬりのつりて
 魚^イ肉^イを^イと^イ考^イへ^イる^イなり—
 ○ぬ^イろ^イこ^イえ^イと製^イするは 米のぬろとあつてぬろこぬ
 瓶^イに^イ納^イめ^イて^イ製^イ—たる何^イ火^イと^イた^イま^イす^イなり—
 玉^イ聖^イ日^イ交^イつ^イさ^イる^イ何^イ前^イか—ぬり一^イ石^イ一^イ塩^イ一^イ斗^イ米^イ

蒸—製—して上^イ白^イ乃^イ米^イ麴^イを右五斗或^イ右^イ入^イ塩^イ三斗
 合^イくよくくうとつし桶^イはばぬ^イ重^イ三斗日^イを^イ包^イて
 用の味極く甘く色白—
 ○五斗^イ赤^イ赤^イと製^イするは 大豆一斗麴^イ一斗酒^イ糟^イ一斗
 米^イ糠^イ一斗塩^イ一斗右^イの^イつ^イき^イ合^イするなりぬりのつりて
 右^イ—は未^イ習^イ性^イ極^イく勝^イ中^イに^イつ^イき^イ合^イするなりぬりのつりて
 魚^イ肉^イを^イと^イ考^イへ^イる^イなり—
 ○ぬ^イろ^イこ^イえ^イと製^イするは 米のぬろとあつてぬろこぬ
 瓶^イに^イ納^イめ^イて^イ製^イ—たる何^イ火^イと^イた^イま^イす^イなり—
 玉^イ聖^イ日^イ交^イつ^イさ^イる^イ何^イ前^イか—ぬり一^イ石^イ一^イ塩^イ一^イ斗^イ米^イ

并湯油のうごと入白く終つるまでお上げ温氣
乃強りしうごと入白くも瓶とてははらふと
ましく至来年正月より又白く入つたもの
器に入る

○又法ぬくと多にうかくこQ大さお片堂の内
に沸らやうと瓶とては瓶にうくも入至十
又日研とてかうとあつ日より白く入つて
うきえと塩とてうく白くは合せた物を桶
て毛瓶にうくと器に入つて付まより塩いあてよ
うきえと瓶とてははらふと入つてははらふと

臭かじ良法あり腹中に氣滞りしを消し
病人に用へ

○厚鳧と塩淹する法 厚鳧を丸毛とぬきまて
腸と去洗つす毛をぬき丸毛と腹に塩とて入
又ゆりも湯行あつ塩と多くこも入又外も塩と
よく付足とつるごとつるは合せさうまにけりて
一枚とけの塩ゆきとありも塩はよくこもこと
苞よつとまけりきけまへ一法もこれに塩淹れははら
○塩淹れり法 湯鍋と紙ひきう塩と多くはき
桶に入らうとの切らるる丸とく一両よとらるるを

合せ一俵くまひりくして終せりといふ事
又鷹の包てきくろもくしけいせとたひくくして
こまの包縄をくくろもくして一日の事
よまよ打込して塩た終りたる時つらす
下一或赤土の塩てしるす

○魚を擣漬乃は 魚をよ塩と付く末らつと

一日一夜至 類は漬る云云水かき塩は漬 下はく條は八折しつり 其後取て

あはく塩と漬去紙とせしあ氣とぬく糖よ塩
かすたぐいまんよ塩と用ひ魚をの塩かたれは
あは漬して塩とせりさく魚をと擣は漬くのち

とりのとやきまへしゆりしとかるのちこの魚の
方あはの煙をきくるとあはくまひりてすしをなす
其を風引んやぐ擣は擣せされい魚をも擣せ
を物と二枚用てまよしと耐をく擣くくは酒交
塩あを加へやうけくし

○雑餅 餅 名は塩引とまは法大に切より骨と云海
浸さるるまのくくろもくならんよぬさ平へし
おむすけ屋下よつらけきまてしりて或はつらその
よとくろもくしるすしりし海は浸せは擣あはぬ
○乾大根とまは法 中きり初日蒸すの皮と削

根乃事よ各小繩乃海乃穴とわけ小繩よ夢あまく
 風ぬ事お夢よとさうら日お夢よりけまて大さの
 終る事え凡三平日をよとさうら 三喜れ日かて
 ぬれ何てぬおれゆけくまうけく物
 あつ拍ちくくして風事喜佳

○あま棚共あま前乃つけ物と夢海へてまは朋共前あまの
 大たのよとあくと能渡二三日日と布一丈ぬのこさよ
 つまらぬ終ちとつり海とそに改渡てすー初より
 とそらつこれの味夢して物一久くくあまさす
 半あま夢も又とさうつけくさうてすー

人乃生實よりう業中の中事とあそく人あつてと
 紙すれ口舌とたうらうあまう人乃の中事と紙片
 に切らうて縁自れあにけりえうらつけとまあして海
 湯と救及泡とれ毒まありかたれくはてと投と
 う世あま次あま毒星と又あめ凡中事と泡とらうと熱湯
 乃終とあくと中事とひえて後事何れ又熱湯よ
 入へてあけせされの毒とす

夢中あまの夢水と解夢へて夢あぬ教乃熱英腕月ととと
 扱め夢よ入る事方の中の地中はうらうらとことと
 扱めひ風ぬれ不復やうはとて凡脈と水の功因と事と

能一切の瘡癩及瘰癧癰疽疔瘡毒疥癬疔瘡と
 治し目疾といやこれといふ油と他り疥癬とゆれん味
 煎美にして久し燻毛とて録肉と浸せらるる月と換
 せ候又又穀百果乾蔬乃穉子と浸せらるる多くして
 煎と生せり血日といふと毒て云高の瘡癩疔瘡
 と治むと月令度義と見えり又いそく臘を水の中と
 食煎とのりは煮く物御神をいれ候とすれは不異
 臘月と名めたる香油と焼し煎すまは徳器不入膏
 葉に用て非効有り婦人の頭ぬれは髪よく光りて
 丹生せり多之能く終業の用とて下し飲食業候と

これと用て功他油と倍は又臘月の粘脂も瘡
 野々膏葉等と合す下し月令度義と見えり
 凡刃劔鉄杖等ととて十月より正月までの間は
 下しあれ性よく煮く備生せり穉子多中といふは良子
 柳の枝と切て立まれば油と揮はれぬりて根と生ま
 ば月忍冬と煮と納まへこれと又月令義とよく瘡
 下しのめは瘡疥と瘡す
 冬月甚多して寝るの者いれりよく男冷て瘡
 或冬月あはれ瘡とく瘡死とらり何の口敷すといふ瘡
 微氣のふたを煮く冷夜と服すて常（此書）瘡

片の衣とてつくこれとつこちてみ果と飯費一て袋
 に入らんとて厨子へ一米ひゆまハ又他の袋に炒り
 たの米とて今厨子へ一或火とたきる竈の下に灰
 と用ひてうらうらしてあつて日用氣同く
 法を薑湯温酒燗をこてあてて保す今一生こつと
 と温す一て火とてこつて冷動とたきとまき
 必す又雄黄煇硝等分と用て末に赤眼症に投じて
 縦横物志よとく十二月甲子の日と食らひは
 難る月令度義よとく猪肉猪肺生肌と食らひと
 已き果菜と食らひはと多食か決元

物れ筋骨と食事かかれ果菜書にとく蟹と食
 らひはと害す牛肉と食らひはと害す
 ありと食らひはと害す神氣と持す神蝦乃製と食
 事かかれ果菜は腹よとくは月のと辛改と食ら
 一他月これと食らひはと害す
 損軒乃後と雜書の中はと正月の食物禁とて
 その多し毎小某月某物と食らひはと害す
 小於法馬家の物志と夜とて一詳しとて知ら
 此とて知らふとて一古れ方書にともて
 さら亦他家が草にともて裁とて和のとれ多しと

八幡疫神系 廿五日と法成系○廿二日 赤山善心寺
新也系也○初宣 勸修系

二月

朔日 七日と南教西多世同中宮と二月堂新○四日
初年系○七日 十日と南教勢の能○九日 十と
少野新也達き系経後○十日 少麻苑寺系○十一日
涅槃會 暖藏大徳社 赤山園善心系○十六日 後法
○廿日 濱月系○廿二日 更寺伶人系○廿五日 送前
寺系 少野天祿神系吉野院中 龍長寺府系八徳所 初卯
大系系系○初午 掃帚 止女堂 赤橋寺藏

法成 和泉國水月と初午系○上申 春日系○後春系

三月

三日 替年カシラ 關籠 恒春卯午 石山系 栗津系 土伏
初午辰石 ○又日 一系寺系 竹号寺系○六日 一系寺
今日より十八日と暖藏大念佛○八日 泉涌寺系
忌○九日 水尾系 泉涌寺系 天山忌辨の形○十日 今系
安楽花○十一日 吉野會系 付花見○十二日 今日より
日と天台経系日長八馬の 加敷系加敷系 今日より十日と善導寺大師
系赤山系 ○十四日 三系會併 吉野と○十五日 比良系
赤山系 大念佛 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系
赤山系 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系 赤山系

○十九日 暖後稻也身拔。○廿日 東寺仁如弘法親從
之雄女侍。○中の午午の日にちを討ハ初初の午初なり初宿高の御出。○廿日
彦佛彦佛字字綱綱之流之流素摘素摘 石清水修時石清水修時

四月

朔日 以列筑麻彦。○二日 三日 南都ありをの終。○四日
廣野彦 龍田彦。○八日 灌佛。○九日 戒壇堂五能。○
九月 流多地彦。○十四日 南都の法事。○十六日 三
井寺之園之園彦。○十七日 紀州和歌山彦 雜賀雜賀師
日之山日之山東照彦。○尾列久古尾列久古南南後後彦。○廿日 勢
田田見見。○廿一日 多多尾尾智智休休。○上卯 新新彦彦彦彦 彦彦彦彦

○乙辰 八八徳徳彦彦。○上巳 山山科科彦彦 以列多以列多彦彦 同同堅堅田田彦彦
○初申 大大系系彦彦 平平野野彦彦。○初酉 松松尾尾彦彦。○初亥 大大津津彦彦
○中子 吉吉田田彦彦。○中卯 以列八以列八徳徳彦彦。○中辰 向日向日彦彦
○中巳 久久世世彦彦。○中午 美美彦彦彦彦 以列以列若若のの彦彦。○中
申 美美彦彦彦彦 山山王王日日吉吉彦彦 山山上上彦彦。○中酉 美美彦彦彦彦
美美彦彦彦彦 松松尾尾彦彦 梅梅彦彦彦彦 岡岡白白願願聖聖彦彦 沖沖彦彦彦彦。○中
亥 暖暖彦彦彦彦

五月

朔日 美美彦彦彦彦之之孫孫 以列松以列松中中彦彦。○二日 美美彦彦彦彦之之
美美彦彦彦彦之之孫孫 岡岡のの御御孫孫彦彦。○七日 今今文文弥弥興興彦彦出出。○八日

三法堂○十三日 懷州家國郡堂○十八日 今交堂○廿日
字法堂見○廿三日 坂本支社堂○廿八日 住吉河田人
○晦日 祇堂沖輿渡

七月

朔日 廿一と富吉法○二日 高旗の虫掛初日○又日
祇園會渡り初○七日 祇園會 今日より十日と祇堂
御旅堂○十四日 祇堂會 尾州津島堂 竹生橋堂
後朝天子堂○十五日 尾州津島堂 江戸の堂二堂
尾州津島堂 祇堂會他堂 寺の小金祇堂會○十六日
今日より伊勢多乳○十七日 お國寺懺法寺堂

空 廣島堂○十八日 祇堂沖輿入○十九日 四多河原
納経七月より○廿日 納経行切○廿日 納経の納経
○廿二日 大坂左衛門堂○廿三日 松尾邪家て納経
明日多敷○廿四日 老定干日法○廿五日 法寺の出平
王舌虫掛 大坂天後法 楊立堂○晦日 聖殿久五月
法 住吉沖法 江別唐橋日系○多月中 聖堂寺堂

七月

朔日 聖殿後見法○六日 少野市子法○七日 少野社
壇煤掛 車箱虫掛寺堂并池坊立祀 苑寺并辰朝 山伏
冬入○八日 文珠會○九日 云々法○十日 清水子日法

大津田後文系 五條天孫系 山科口の文系 依方西秀系
 ○十一日 伊勢寺幣 出陣 吉田了之 伊勢津波舎 ○十二日
 右秦系 ○十三日 白川系 ○十五日 志念系 桑田口系 江津新田
 津之三年上之殿能馬 河内了文系 寺前小倉系 ○十六日 東
 山系 孫系 王若系 ○十七日 持別池田系 服澤系 ○廿日 下系
 中女系 名取系 竹田系 建仁寺門外夷系 整馬文系 懐也
 の良 ○廿一日 大坂府麻系 院系 ○廿二日 右秦系 ○廿三日 國持系
 本幡系 津土系 麻若系 別運燈系 ○廿五日 天保流満之活
 田系 ○廿六日 山系 ○廿七日 持別池田系 ○廿八日 信濃系 大坂橋
 五系 ○廿九日 月防系 ○首月 中書系 寺系 寺系 寺系

十月

又日 妙心寺遊 又日 上之海寺 寺十夜 ○六日 南無彌
 寺法會 ○十日 修別金良系 十一日 寺系 寺系 ○十
 二日 日蓮系 彩儀 ○十三日 曙橋麻王院系 寺系 寺系 寺系
 寺系 ○十六日 高橋寺 寺系 ○十七日 内谷系 寺系 ○廿日 江
 戶徳商人夷系 寺系 寺系 寺系 寺系 ○廿二日 寺系 寺系 寺系

十一月

八日 寺系 ○十三日 寺系 ○廿二日 寺系 ○廿二日 寺系 ○廿二日
 寺系 ○廿三日 佛系 ○廿四日 寺系 ○廿五日 寺系 ○廿六日 寺系
 寺系 ○廿七日 寺系 ○廿八日 寺系 ○廿九日 寺系 ○三十日 寺系

月全博物笈大意

左記より正月一月の

正月 此次より正月の名始りつり正月古今
と唐と和歌と月の違ふり且正月の
異名とあり古歌と加へ委しくつり

節 元日立春年終立春の記と記一異年内立春
能借の心得と記と詩・歌・能借・狂歌・故事・詩・詩礎と出
作例 守且又世俗の夏小立春の日天氣見
立春の日の天氣雲の色等して年中の吉凶を
諸式豊凶高下等或は養生の道迄とあると

日令 元日と祝ふつり異名の註と
記 詩・歌・能借を出入例とす 蓬萊と

大服 大くつと祝ふつり
歌・能借等と出

元日妙術 種々の妙術とある
驚くべき不老の法也

京 祭礼行事とある
能借の心得と記と諸國祭と記

金葉書不仁寶鏡

右小あるす万分の一あり餘は准て知るべし

禁中御門跡方御大各方乃記
放実討遠手習等乃折南儀傳
授弄小儀百番儀秋連能仕模法
藝類方古札儀方れ式唐音傳授
立花生も茶湯式も弄術とて
藝能師通へりつり
本にりるなり
一智日惠枕 全三冊
世界の事多る事の新奇妙に
心易く徳に仕模弄料理方
りつり

状 毎月の手紙とあるす六ヶ敷とて様と記
上中下の各層と記と是物の異名及漢文とあると

月令 此部より月日の定
外記政始とあり
男女

衣服式 此月衣服の作法とあり
時令 時令初春

草木 月草類とあり異名漢名とあり尚又詩
能借の心得と記と詩・歌・能借・狂歌・故事と出
採時 久し野分法と記と妙術方物病名用ひ

生類 此部より鳥獸等夫を委りつり
漢名と記と品類あり物と記と出と各れも
連歌・詩・故事と加へ妙術等とあり

飲食 食物善悪喰合と記と料理法と記と
菓類小委りあり飲食養生の仕りつり
久し野分法食物一切入用の事とあり

服用 破軍の向方日と記と養生の仕りつり
日の定りつり人家入用重法の事とあり

出行作事 他行の方角何れ方角の
物と記とつり

金葉書女御秘鏡

全一冊

妙方薬病を治るす神の
おとく奇妙の功驗あり公え
あるは医師ありつり
とてを素と用ひつり
一錦囊秘卷 神伝奇
全一冊
風の吹を止り子孫を富位に昇
不孝れ子孫者終にを拒推妖怪
等瓜退等心と記とつり
つり其外神多ふと記とつり
大坂公并橋南に丁目
上吉文字を市共場

